

地域貢献の現状：鳥取大学附属図書館の場合

石田 園子*

鳥取大学附属図書館医学部分館

I. はじめに

鳥取大学（以下、「本学」という）附属図書館は、鳥取市にある中央図書館（以下、「中央館」という）と米子市にある医学部分館（以下、「分館」という）の2館で構成されている。

鳥取県は東西に長い県で、鳥取市、倉吉市、米子市、境港市の4市と14町1村で構成され、東部に位置する鳥取市と西部に位置する米子市とは88 km離れている。そのため、連絡や協力体制等において何かと不便なこともあるが、かえって県内全域レベルの連携を進めることにおいて重要なキーポイントとなった。

地域貢献における附属図書館の活動については、平成17年度まで白木図書館情報課長（現広島大学図書館部学術情報普及課長）と森田資料サービス係長が、他誌で発表¹⁾しているので簡単な経緯のみにとどめる。

ここでは分館の事例を中心に紹介していくが、中央館の平成18年度新規活動事項も他館の参考になると思われるのであわせて紹介したい。

II. 分館の地域住民へのサービス

分館は、地域住民の利用に対して平成16年3月までは「一日入館票」に必要な事項を記入してもらうことにより、館内資料の閲覧サービスのみを提供していたが、平成16年4月から「一日入館票」への記入は不要とし、自由に閲覧してもらうようにした。

平成16年6月からは図書の貸出サービスを開始し、貸出冊数・貸出期間は2冊まで14日間としている。手続は申請書に必要な事項を記入のうえ、身分を明らかにする書類（身分証明書、運転免許証等）の提示によって利用者カードを発行し貸出を行っている。

登録者の半数は看護師などの医療関係者で、残りの半

数も近隣の看護系学生が多数を占めている。そのため、貸出、複写とも看護分野が多く、医中誌 Web の DB 検索と資料の所蔵について説明を行っている。利用時間は時間帯別貸出統計によると、18時～19時が最も多く利用している。

分館所蔵資料の文献複写について、来館できる場合は文献複写申込書を記入し図書館員に提出のうえ、利用者がコイン式コピー機で複写を行い、来館できない場合には複写料金の前納を条件とし、1枚あたりモノクロ35円、カラー85円で複写サービスを提供している。

また、平成17年5月からは図書館内のインターネットに接続したパソコンの利用についても、希望があれば利用者カードの提示により、ログインキー（USBメモリーキー）を貸し出して、パソコンを利用できる環境を整備した。学外者へのログインキーの貸出は1日平均1回弱である。また、OPAC、医中誌 Web、Pubmedのみが利用できるログイン不要のPCを別に1台設置している。

III. 県内図書館との連携

1. 県内大学図書館との連携

県内の大学間の連携を深めるため、平成13年に本学が鳥取環境大学（以下、「環境大学」という）、鳥取短期大学の2大学と米子工業高等専門学校（以下、「米子高専」という）にも呼びかけ、「鳥取県大学図書館等協議会」を設立した。

幹事館は本学が担当し、副幹事館は毎年持ち回りで年1回の総会を開催している。

分館の場合、一般の学外者への貸出は2冊までとし、協議会員館の構成員は3冊までとして便宜を図っているが、実際の利用は少ない。そのため、学外講師による学術文献データベース講習会への案内など、より効果的な連携ができるよう努めている。

2. 鳥取県立図書館との連携

本学附属図書館が最初に相互協力協定を締結したのは

*Sonoko ISHIDA : 〒683-8503 鳥取県米子市西町86.

Tel.0859-38-6462 Fax.0859-38-6469

s-ishida@zim.tottori-u.ac.jp

(2006年9月22日 受理)

鳥取県立図書館（以下、「県立図書館」という）であった。
平成14年12月に相互協力に関する協定書に調印し、その事項として、

- 1) 図書資料の相互貸借に関すること。
- 2) 図書資料の文献複写に関すること。
- 3) レファレンス（参考相談・調査・紹介）に関すること。
- 4) 図書館利用者講座に関すること。
- 5) 横断検索に関すること。
- 6) 職員の相互交流に関すること。

を掲げている。

ただし、協定は締結したものの、分館と県立図書館の間で実際にサービス内容を具体化したのは平成16年8月からである。

まず、相互貸借について、県立図書館と分館の双方とも、貸借の受付をした場合は宅配便で送付し、宅配料金は依頼館ではなく受付館が負担することになった。分館では、このシステムで借用した図書を「リクエスト図書」とし、後述の「協力用図書」とは区別している。返却する時は、県立図書館と分館の双方とも県立図書館の搬送車を利用することにした。

県立図書館の搬送車は、基本的に月に2回巡回し、巡回ルートの中に分館も組み入れてもらった。

開始して2年以上経ったが、一方的に分館が依頼し恩恵を受けているような状況である。

県立図書館は、分館だけでなく県内のすべての図書館に2日以内に図書が届く宅配システムを構築し、市町村立図書館や高等学校図書館等を対象とした3ヶ月ごとに300冊を貸し出す一括大量（協力用図書）のサービスも行っている。

当時、分館は高騰する外国雑誌や電子ジャーナル購入のため、新刊の医学書購入もままならない状況で、一般教養書や小説類などに充てる予算の確保は困難な状況であった。

将来医師、看護師となる学生にとって、専門書は当然必要だが、専門書以外の図書にもっと触れて欲しいと常々考えていたので、このサービスを知り即座に申し込んだ。

選書の方法は、県立図書館から年度当初に協力用図書として貸出できるリストを分館に送付してもらい、リストを見て図書館スタッフが中心となって選んでいる。長期間の貸出のため、貸出希望の多い新刊は含まない。

協力用図書のシステムの概略は図1、利用状況は図2のとおり、3館と協力用図書を実施しており、米子と境港については後述で説明する。リクエスト図書は1ヶ月

に平均約11冊の利用であり、協力用図書は平均約95冊と大変利用が多い。

現在、学術資料費として図書の購入予算が共通経費化されたので、一般教養書や小説類が購入できる状況になったが、公共図書館との相互協力を進めるにしたがって、公共図書館が購入されるであろう図書は借りることにして、分館は専門的な資料を収集していくことにしている。

ただし、闘病記については平成14年から闘病記コーナーを設けており、現在160冊程度ではあるが少しずつでも増やしていき、東京都立中央図書館、また、平成18年7月7日にオープンした県立図書館の闘病記文庫のように、病名別の索引をつけて提供していきたいと考えている。

その際、分館だけの収集ではなく、県西部にある公共図書館の蔵書から様々な分類で書架に並んでいる図書を掘り起こし、一緒に所蔵データを持てば、県の東・西部の両方ともそれぞれの地域の皆さんが近くの図書館に行き、そこで利用できると思う。

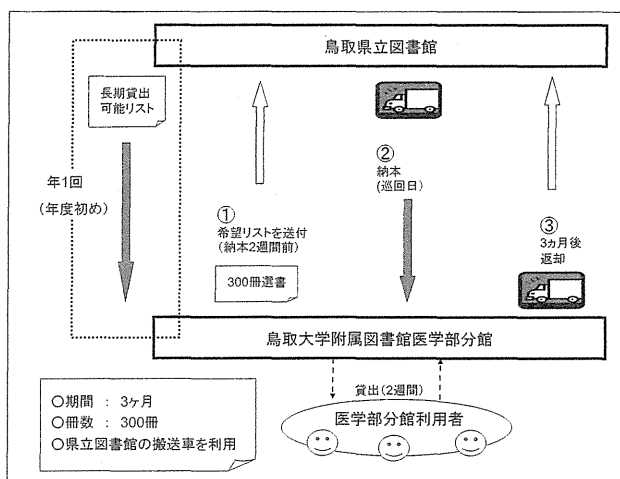


図1. 鳥取県立図書館の協力用図書システム概略

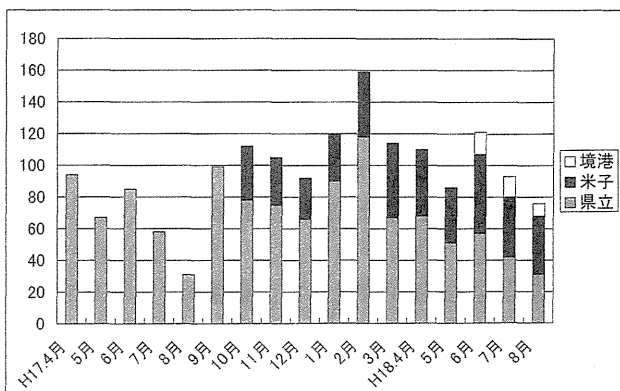


図2. 協力用図書利用状況

3. 分館と米子市立図書館との連携

米子市立図書館（以下、「米子図書館」という）は分館から歩いて5分程度の近距離にある。

平成17年5月、本学から相互協力協定の申し入れを行ったところ、米子図書館は既に米子高専と相互協力協定を締結しており、分館との協力協定も想定されていたようで即答で快諾を得た。

分館と米子図書館との相互協力については、平成17年10月1日から開始することにした。

相互協力の事項としては、県立図書館との協力内容とほぼ同様であるが、県立図書館との協定上で「図書館利用者講座に関すること」という事項については、より具体的に「図書館講演会及び公開展示に関すること」にした。

この時、名ばかりの協定ではつまらないので、双方にメリットのあるように、相手館に何ができるか、相手館に何をしたいかを考えた。

分館が米子図書館に対してできることは、市民から専門的な事項の調査や資料を求められた際に分館が対応することや、本学の教官を講師とした講演会や講習会を開催することである。

逆に分館が米子図書館に求めるものを考えた結果、県立図書館の協力用図書と同様に、不足している一般教養書や小説類の長期貸出だった。

すでに米子図書館は、米子市内の小中学校を対象に一定期間のセット本貸出サービスを実施しており、分館に対しても3ヶ月ごとに100冊の貸出を行うことに決まった。選書は近距離なのでスタッフ3人が米子図書館に行き、およそ1時間位かけ直接書架から図書を選んでいる。

県立図書館からの協力用図書はリストからタイトルや著者名で判断して選んでおり、米子図書館より倍以上の冊数が届いているのだが、ここ数ヶ月、貸出数は米子図書館と県立図書館の差が図2のようにほとんどない。やはり、実物を手にとって内容を吟味している違いは大きいようだ。

また、このサービスは平成11年から本学附属病院にある院内図書室に対して既に行われていたのだが、図書の搬送は本学病院職員が米子図書館に出向いていたので、搬送ルートに院内図書室を入れるように交渉して協定時に改善できた。

相互協力協定締結を記念して、講演会「チャレンジコミュニケーション-コミュニケーション上手になるために-」を、本学の教官を講師として米子図書館大会議室にて開催した。日時は平日の14時～16時30分に設定し、

参加者は60名だった。

学内で行う講演会より、気軽に足を運べる公共図書館の方が地域住民の集客力が高い傾向があり、アンケートを集計した結果、講演会の情報は「よなご市報」や新聞から得たという回答が多く、残念ながら分館のホームページという回答はほとんどなかった。地域住民の参加を募るために市報や新聞への掲載は宣伝効果が大きいことをあらためて感じた。

また、講習会「プレゼンテーション入門- Power Pointの使い方」を平成18年2月に米子図書館と共催で行った。場所はコンピュータ機器が揃っている本学医学部のコンピュータ演習室で、講師は図書館情報課長に依頼し、分館スタッフはアシスタントとして参加した。

米子図書館スタッフの研修も兼ねて、日時は双方の図書館スタッフが参加しやすいように月末休日の午前を設定したが、申込者が多いため午前と午後の2回行った。

最終的には52名の参加となり、地域住民が50%、学内の教官や学生が35%、残り15%が米子図書館スタッフであった。

学内者から受講の申込が多かったのは予想外であり、地域に対しては当然だが学内に向けても図書館の存在意義をアピールできるよい機会となった。

4. 分館と境港市民図書館との連携

境港市にある境港市民図書館（以下、「境港図書館」という）は分館から約30 km離れた距離にある。

平成18年1月に協定の話し合いを初めて持ち、それまでに分館が米子図書館との協定を締結していたこともあってか、スムーズに話し合いが進んだ。

相互協力については平成18年5月1日からとし、相互協力の事項は米子図書館との協力内容と同様となった。

協力用として貸出を受ける図書は、境港図書館の蔵書数から考えて50冊とし、期間は県立図書館、米子図書館と同じ3ヶ月間とした。図書の搬送は県立図書館の搬送車を利用し（図3）、選書は年度当初に境港図書館から送付されたリストより分館スタッフが選ぶことにした。

また、相互協力協定締結を記念して、講演会「骨の今昔物語-遺跡の骨・現代の骨から分かること-」を本学の教官を講師として開催した。土曜日の15時～16時30分に設定し、参加者は170名であった。

参加者が多かったのは、講師の知名度や興味を引く演題は当然のことながら、境港図書館の広報の仕方であった。境港図書館を管轄している境港市生涯教育課が市に

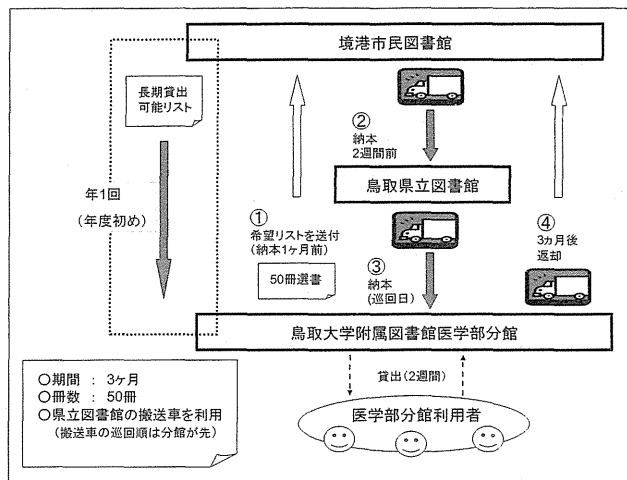


図3. 境港市民図書館の協力用図書システム概略

登録している各サークルに案内状を配布したり、図書館長自らが知人に電話をかけたり、熱心な広報が参加者者につながった。

協力体制をアクティブなものにするために、共催事業は年2回を目標にし、平成17年度に行った米子図書館との講習会アンケートで希望が多かったホームページ講習会を、平成18年11月に本学医学部のコンピュータ演習室において開催予定である。

この講習会は米子図書館も一緒に催すことにし、境港図書館と分館の3館共催で行うことにした。地域の輪をますます広げていこうと考えている。

5. 中央館と市立図書館との連携

1) 中央館と鳥取市立中央図書館との連携

中央館と鳥取市立中央図書館（以下、「鳥取図書館」という）は、分館と米子図書館との協定期間と同じ平成17年度10月1日から相互協力を開始した。

県立図書館との連携の違いは、県立図書館とは図書館間の現物貸借であるのに対して、鳥取図書館とは、鳥取図書館対個人（本学構成員）のシステムとなっている。詳細は他誌の発表¹⁾を参照願いたい。

2) 中央館と倉吉市立図書館との連携

中央館は倉吉市立図書館（以下、「倉吉図書館」という）と平成18年9月1日から相互協力を開始し、これで本学は県下4市すべての市立図書館と協定を結んだことになった。

協定記念講演会では、医学部の教官が講師を務めた。公共図書館にとっては、本学の教職員を講師として講演会等を開催するにあたって、協定相手が中央館、分館にかかわらず、講演内容や講師の人選の選択肢が増えるこ

とになり、また本学にとっては活躍の場が広がることになる。

6. 中央館と東部地区図書館との連携

中央館が発起人となり、東部地区にある県立図書館、環境大学、鳥取図書館の4館が館種を超えた連携を行っている。

4館の協議事項の中より、中央館の資料を県立高校教員に貸し出すサービスが平成18年度からスタートした。

また、中央館と県立図書館の職員の相互交流が実現し、中央館に平成18年7月10日から5日間、県立図書館に平成18年9月4日から5日間、それぞれの職員1名が派遣された。

派遣された職員は、異館種の図書館業務を体験したことにより、他館の優れた点を取りいれて自館の問題解決につなげていけることと思う。また、両館にとって新たな試みは活性化の足がかりになると考える。

IV. 職場体験学習・インターンシップ

社会貢献の一環として、地元の中学生を対象とした「職場体験学習」を平成17年度にはじめて受け入れた。

通常は5日間通して図書館での職場体験となるところだが、医学部としての受け入れだったため、毎日違う部局を回り、その中の1日を分館が担当をした。

職場体験の内容は、カウンター業務・受入業務・文献複写・書架整理などで分館スタッフがそれぞれの担当業務について中学生に説明をした。

なお、中央館は平成12年から受け入れを開始し、現在は2校の中学校を継続して毎年受け入れている。

インターンシップについては、平成18年度初めて受け入れを表明したが、希望者はなかった。

職場体験学習とインターンシップの両方については、社会貢献や図書館職員としても「教えることは学ぶこと」につながることから、今後も積極的に受け入れていこうと考えている。

V. 公開展示

難病の患者を主人公とした本が、テレビ化や映画化されて、多くの人たちがその病気を知るところとなるが、例え医事監修されていてもドラマゆえに視聴者が誤った認識をもつような場合もある。

その病気の研究に長年携わってきた本学の教官から、少なくとも医学生にはその病気に対して正しい認識を持って欲しいという思いを聴き、分館が協力して平成

18年9月にその病気に関係した図書や雑誌論文、またDVDを揃えて閲覧室に展示し、協定を結んでいる公共図書館にも展示の案内や資料内容をお知らせした。

今後もテーマを決め、初歩から専門的な資料、また、DVDなどのビジュアルな資料も揃え、医学図書館だからこそできる展示を地域にも発信していきたいと考えている。

VI. 鳥取県図書館協会との連携

平成17年7月に開催された第11回鳥取県図書館大会において、中央館の森田係長が「進化する学術情報と大学図書館の役割」を演題に、大学図書館の現状と地域連携について事例発表を行った。

平成18年8月には分館に鳥取県図書館協会の一行（公共図書館、学校図書館、中央公民館図書室の職員等）61名が視察に訪れた。

この視察は、同協会が図書館を核とした「知の地域づくり」を進めるため、館種を超えた図書館間の連携のあり方や運営の仕方等を研修し、今後の鳥取県の図書館活動に役立てることを目的として、特色ある活動をしている図書館を対象に毎年実施している。

分館では、こうした視察などの実際に顔を合わせた交流の取り組みをとおして、地域の医学情報や学習の拠点として気軽に利用してもらえるよう、今後もさらに連携を推進していきたいと考えている。

VII. 横断検索

相互協力協定事項として掲げた横断検索は、平成17年3月、本学の図書館システム更新の一環として導入し、平成18年9月現在、鳥取県大学図書館等協議会加盟館ならびに県立図書館と4市の図書館資料の約250万冊が利用できる環境になった。

VIII. まとめ

平成18年6月に「大学の地域貢献度のランキング」が発表²⁾され、本学が3位に入った。これは、東京都を除く全国の国公私立大135校を対象に日経産業消費研究所が2006年に調査した結果で、調査は住民向け地域貢献事業など15問を点数化してランキングされていた。本学附属図書館は、公共図書館との協力協定締結や講演会等の開催によってこの結果に貢献したと自負している。

そして、本学が県内図書館ネットワークを図4のよう

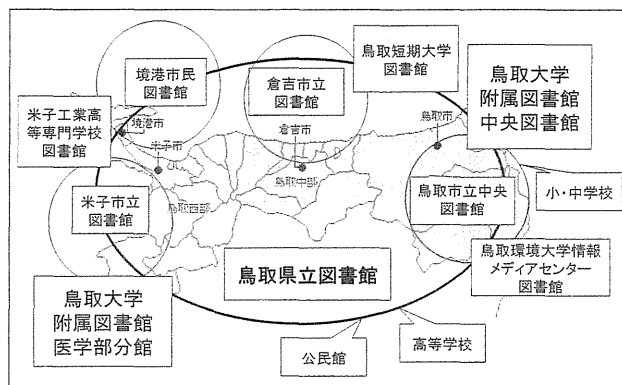


図4. 鳥取県内図書館ネットワーク³⁾

に構築できた³⁾のは、大きく2つの要因がある。一つは冒頭に記述したように、中央館と分館が県の東西に分かれ、それぞれの地域の拠点となったことである。

もう一つは、県立図書館の搬送システムを利用できたことである。県民の「知の地域づくり」を進め、「知的立県」を目指すため、図書館に対して非常にウエイトを置く県と、それをうけて次々と新事業を展開している県立図書館の推進力が背景にあった。

IX. おわりに

地域貢献は、本学の中期目標の3本柱の一つでもあり、文部科学省が平成18年3月に取りまとめた「これからの図書館像－地域を支える情報拠点をめざして－」⁴⁾はまさに公共図書館だけでなく、大学図書館においても地域や住民にとって役に立つ図書館として、存在意義を確立することが求められてくる。

それには、現在行っている事業を推し進めながら、住民がワンストップで情報が収集できるようホームページの充実を図ったり、住民に対してより積極的に自館の強みをアピールし、開かれた図書館として更にサービスを展開していきたいと考えている。

参考文献

- 1) 白木俊男, 森田正. 鳥取大学附属図書館における社会貢献の現状: 県内図書館との連携. 大学図書館研究 2006; 76:54-61.
- 2) 菅野由一, 澤村正仁. 特集: 大学の地域貢献度ランキング. 日経グローバル 2006;53:6-17.
- 3) 森田正. 鳥取大学附属図書館と県内図書館ネットワーク. 図書館雑誌 2006;100(5):276-7.
- 4) これからの図書館の在り方検討協力者会議. これからの図書館像: 地域を支える情報拠点をめざして[internet]. http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/04/06032701.htm [accessed 2006-09-19]

Present condition of regional contributions: Tottori University Library

Sonoko ISHIDA

Tottori University Medical Library, 86 Nishi-cho, Yonago-shi, Tottori 683-8503, Japan

Abstract: Tottori University and its attached library strives to cooperate with college or public libraries within the prefecture and is involved in mutual cooperation schemes to ensure the best use of the features of each library. Promoting such cooperation among libraries contributes to the local community and

provides substantial services to the area's residents.

Key words: regional contribution; social cooperation; social contribution; mutual cooperation; library cooperation
(*Igaku Toshokan* 2006;53(4):404-409)